

『天台法華疏義續』における『法華文句記』批判について

松 森 秀 幸

一 はじめに

智度は湛然門下と推定される人物で、彼の著作である『天台法華疏義續』(以下、『義續』)は、『法華経』⁽¹⁾ならびに『法華文句』(以下、『文句』)に対する注釈書である。智度が活躍したと考えられる中唐時代の天台仏教にあつては、現存する著作でも彼の著作以外に道暹『文句輔正記』(以下、『輔正記』)や智雲『文句私志記』といった『文句』注釈書が著されており、当時の状況は「極めて自由な立場をとつて師説を批判し、同門競つて祖典の理解を深めようとしていた」と評されている⁽²⁾。『義續』においても『法華文句記』(以下、『文句記』)とは異なる解釈が多く存在する。それらの傾向は、『文句記』との解釈の相違が批判という形で強調されているかどうかという点から、形式的に二分することができる。本稿では、そのうち、智度が自覚的・積極的に湛然との解釈の違いを提示(批判)している箇所、さらにその中でも『義續』と『文句記』

の関係性を考える上で重要と思われる箇所を取り上げ、『義續』における『文句記』批判の特徴を明らかにしたい。

二 『義續』における『文句記』の基本的な地位

具体的な『文句』批判の検討に入る前に、先ず第一に確認しなければならないことは、『義續』の基本的な立場が、『文句記』に対し一定の敬意を払っていたという点である。従来、智度は『義續』において、自由な態度でしばしば師説である湛然の『文句記』を批判したとされ、本稿でもその批判的側面を中心に取り上げるが、しかし、智度がかつぱら『文句記』に対する批判ばかりをしているかと言えば決してそうではなく、逆に基本的な立場としては、『文句』とほぼ同程度に『文句記』を重要視していた。

たとえば、『義續』よりもやや成立が早いと考えられる『輔正記』を批判する場合に、「有云」と人名や書名を明示せず、ただ「誤」などと否定しているが(続蔵二九、七五中一一

『天台法華疏義續』における『法華文句記』批判について（松森）

二八

一四）、『文句記』（ならびに『文句』）を批判する箇所では、「恐誤」というように、ほぼ必ず「恐」の字を添えて、その説を批判している。「恐」の字義は本来は推測の意であるが、ここでは断定的でない方を避けて、批判対象に敬意を払っていると考えられる。

また基本的注釈形式をみても、『義續』は「経」と称して『法華経』を取り上げ、「疏」と称して『文句』を取り上げ、さらに「記」と称して『文句記』を取り上げて注釈を付すという形式を採用している。このように表面上は『義續』が『文句記』を他の注釈書とは別の扱いをしていたことは明らかといえよう。

ただし、このように『文句記』を注釈の対象として取り上げるのは『義續』に限ったことではなく、同時期の『輔正記』や『文句私志記』にも共通してみられる傾向である。したがって、中唐の天台系の仏教において、『文句記』はその成立後かなり早い段階で、『文句』注釈書の権威としての地位をすでに確立していたものと考えられる。

三 三因仏性をめぐる問題

『義續』には、六法（五陰と神我）と三因仏性の関係について、『文句記』とは異なる解釈を提示する箇所がある。『文句』は、『法華経』の「世間相常住」（大正九、九中一〇）を三因仏性に

対応させて、「此正因不即六法、縁了不離六法」（大正三四、五八上一五—一六）と注釈している。

この箇所に対して『文句記』は『文句』がこのように偏った解釈をするのは、「以易顕故。正本不離、今加不即。縁了不即、今加不離」（大正三四、二四七下一〇—一一）と理解したうえで、三因仏性と六法の対応関係には、通対と別対の二種があるとの解釈を提示し、「通対」においては、正因仏性と六法の関係は不即不離であり、縁因・了因仏性と六法も不即不離であるので、三因仏性と六法は不即不離であると指摘する。そして『文句』では説かれない「別対」の対応関係として、行・神我と縁因、受・想・色と了因、識と正因という関係（大正三四、二四七下一五—一六）を指摘している。

『義續』は上記の『文句』と対応する箇所において、基本的な解釈の枠組みは『文句記』を継承し、「総対」・「別対」と名づけてその対応関係を示している。しかし、「別対」の対応関係においては、識と正因、色と了因、受・想・行・神我と縁因が対応するという関係を提示し（統藏二九、五六上一〇—一一）、記中、受想与色為了因、恐悞」（統藏二九、五六上二一）と『文句記』の色・受・想を了因に対応させている点が間違であると批判している。

ただし、湛然は『止観輔行伝弘決』（以下、『輔行』）において六法と三因仏性の対応関係について、『摩訶止観』卷三の（大

正四六、二三下二一七)における三徳・四徳と五陰との関係を受けて注釈をしているが(大正四六、三六六中二九一下一二)、この箇所『輔行』は、正因と色、了因と識、縁因と受・想・行・神我とが対応するという関係を指摘しており、『文句記』の注釈と異なっている点は注意を要する。『義續』は、正因・了因仏性においては、『輔行』と異なる解釈をしているが、縁因仏性に関して言えば、『輔行』と『義續』は一致を見ている。

また、この箇所については『輔正記』も、「別対」として、六法と三徳、三因仏性のそれぞれを対応させて論じており、『義續』と同じく色と了因、識と正因、受・想・行・神我と縁因という対応関係を指摘している。ただし、『輔正記』には『文句記』との解釈の相違についての言及はみられない(続蔵二九、五六中八―九)。

この箇所の『文句記』にはこれ以上の詳しい記述がないため、湛然が了因に受・想を加えた理由は定かではない。『義續』『輔正記』の両書は、『文句記』が示した六法と三因仏性の通別の対応関係という理解の枠組みは継承しながらも、細部において同じく湛然の説を採用しなかった点は重要である。また、とくに両書の間で『文句記』との解釈の違いを明示するかどうかという注釈態度の相違があることは、湛然との関係性を考えるうえで注目すべき箇所といえる。

『天台法華疏義續』における『法華文句記』批判について(松森)

四 「有人」の科段について

『文句』は法師品の注釈において、「有人分、此品下十一品、是神通身輪、開本迹。從弥勒問下、是説法口輪、開本迹」(大正三四、一一三下三一五)と『法華経』の科段に関する「有人」の説を紹介し、この説は本迹の意が明らかでなく、ここから文を区切るのは、やや早いと評している。

この部分について、『文句記』は「有人」を廬山慧龍の説であると特定し、『文句』が「此品下十一品」とするのは間違いであり、正しくは宝塔品から経の終わりまでの「十六品」であると指摘する。湛然が「有人」を慧龍と特定した根拠は、おそらく『文句』に紹介される慧龍の科段(大正三四、一下一八一―二二)が序品から法師品と、宝塔品から経の終わりまでという二段の構造であること、そしてさらに、『文句』で慧龍の説として紹介される「言方便言真実」「身方便身真実」という科段の名称が、「有人」の「説法口輪、開本迹」、「神通身輪、開本迹」という科段の名称と内容的に類似していたためと考えられる。

この『文句記』の注釈においては、注意すべき点が二つある。一つは「然準此師意、言約身者、以多宝為本、釈迦為迹。前約説者、釈迦自説三周開權、及以、流通」(大正三四、三一一中九―一一)と、慧龍の意図を汲んで、『文句』に見られる慧

『天台法華疏義續』における『法華文句記』批判について（松森）

三〇

龍の記述よりも踏み込んだ解釈をしている点である。湛然がこのような解釈をした根拠については示されておらず、定かではない。またもう一つここで注目すべきは、湛然はどうして有人の説を『法華經』全体の科段として理解したのかという点である。『文句』の紹介する有人の説は、『文句』の記述にそって素直に理解すると、「此品」（宝塔品）から「下十一品」（囑累品）までは、「神通身輪」によって、また「弥勒問」以降は、「説法口輪」によって、それぞれ本・迹に開くと書かれている。ここで問題となるのは、「弥勒問」が『法華經』のどこを指しているのかということである。『法華經』において弥勒菩薩の質問として想起されるのは、序品での文殊菩薩への問いと涌出品での釈尊への問いである。いずれも『法華經』全体の導入として、また久遠の釈尊が明かされる導入として經典の構成において重要な役割を担っている。『文句』の文章の構成から判断すれば、この有人の説の「弥勒問」は、「此品下十一品」より後に書かれているので、宝塔品から囑累品の後に位置していると理解されるところであるが、序品は宝塔品・囑累品より遙かに前であるし、涌出品は宝塔品と囑累品の間位置している。これでは有人の説を科段の提示と考えた場合に矛盾が生じてしまう。そこで『文句記』は、科段の記述の提示方法としては順序が逆になってしまい異例ではあるが、「弥勒問」が序品のことであるとの解釈をする

ことで、この矛盾を解消し、さらに慧龍の科段と内容的な類似性を提示して、一定の説得力のある注釈を構築した。したがって『文句記』には「前從弥勒問來」と「前」の字が補われている。

これに対して『義續』は、『文句記』とはまったく異なる解釈を提示している。『義續』は『文句』が提示する「有人」の説が慧龍の説であるとはせず、また、『法華經』全体の段落構造を提示しているものとも理解していない。

『義續』は、『文句記』と同様、「有人」の説の引用に誤りがあることを指摘する。すなわち、「此品下十一品」は「十一品」ではなく「七品」であるとす。そして、「神通身輪」は、宝塔品から分別功德品までの七品のことであり、「説法口輪」は、隨喜功德品から經の終わりまでのことであるという構造を提示する。つまり『義續』は「有人」の説は『法華經』全体の構造を述べたものでなく、宝塔品以降の『法華經』の構造を述べたものであると理解したのである。

ただし、この有人の説は後代の末注書が指摘しているように、実は吉藏の『法華玄論』の「問。若此品具明四種本迹義者、寿量品復何所明耶。答。仏開本迹、凡有二門。一神通輪門、二説法輪門。神通輪開本迹者、從見塔品、至涌出品、現十一種神通、以開本迹。……二從弥勒問、釈迦之答。就説法輪、以開本迹也」（大正三四、三七〇中一六一―一〇）との説

に基づいたものである。ここから、「弥勒問」とは『義續』の理解する通り涌出品における問いであり、『文句記』と『義續』とがともに『文句』の間違いと指摘する「十一品」という記述は、宝塔品から涌出品において示現される十一種の神通力の意味であることがわかる。このように実は『文句』が引用する有人の説とは、本来は科段について論じたものではなく、『文句』によってこの説が引用される際に、その表記が十一種の神通力から十一品へと改められ、科段の議論として取り込まれてしまったのである。したがって、注釈対象である『文句』の本文そのものが矛盾的事であったことが、『文句記』と『義續』の解釈の相違、『義續』による『文句記』批判を招いたといえる。

なお、この箇所の『文句』の主旨は、有人の『法華経』科段への批判にあるので、その説を整合性のあるように解釈する『義續』の理解は、『文句』の意図から離れたものである。

五 『文句』の科段について

『文句記』は、『文句』が本門の三段の科段を提示する中で、流通段の後に「云云」（大正三四、二二四一六）と略記していることについて、一、詳細な説明は各品に譲る。二、本門の流通は経の力が強く、一一に挙げきれない。三、本迹の流通の意味は様々であるとの三つの観点を提示する（大正

三四、三三三下一七—二五）。

この「云云」について、『義續』は『文句記』は間違いであると指摘し、この箇所は本門の流通段の科段の説明が省略されているとして、具体的な科段を提示している。すなわち、『文句』が本門の流通段と規定する分別功德品の弥勒の偈から経の終わりまでの十一品半のうち、初めの三品半（分別功德品の半品、不輕菩薩品）を「明弘経福重」と、残りの八品（神力品、勧発品）を「明嘱累」とに二分し、それぞれをさらに三段に分段するとの説を提示している。これは『義續』自ら「如下分文」（統蔵二九、九七中一一）と述べているように、『文句』（大正三四、一三七上二四—二七）を全く踏襲したものである。『義續』はこのように『文句記』を否定しているが、この直後に「今釈記者、於十六品半中、迹門五品。法師拳法、余四品拳人……事益如縁因、理益如正因。又事益得前三悉、理益第一義悉。雖有此義、注云云意、理則不然。如前」（統蔵二九、九七中一一—二三）と、『文句記』の記述を再び取り上げ注釈の対象としている。ただし、ここでも最後に「注云云意、理則不然。如前」と記していることから、『義續』は基本的にこの部分の『文句記』の注釈を妥当となものと考えていなかったことは明らかである。

『天台法華疏義續』における『法華文句記』批判について（松森）

『天台法華疏義續』における『法華文句記』批判について（松森）

三二

六 むすびに

『義續』は『文句記』に対して一定の敬意を払いつつも、間違いと指摘することで自説との相違点を強調している。これは三因仏性をめぐる問題で確認したように、『義續』と『輔正記』が同じように『文句記』とは異なる解釈をしていながら、『義續』は『文句記』を批判するのに対し、『輔正記』は『文句記』に言及することはない。これは道暹に比べて智度が湛然との違いを強調しようとする傾向が強いことをあらわす一つの証左と考えられる。また、『文句』が批判する「有人」の説を会通してまで、『義續』が『文句記』との解釈の違いを強調しようとしている点も同様であろう。

智度のその自信は、おそらく本書のタイトルに最もよく現れている。『義續』の「續」の字の意味は、『説文』には「續、繼也」とある。これが継承の意味であることから推測すれば、『天台法華経疏義續』というタイトルは、自分が天台法華経疏の義を正しく継承しているとの宣言として理解できる。最澄の将来目録にみられる「天台第七祖智度和尚略伝一卷（沙門志明集）」（大正五五、一〇五九上五）との伝記の存在と、円珍入唐時の国清寺に『義續』が所蔵されていたという事実からみて、主流派にはなれなかつたとはいえ、当時、智度を支持する勢力が天台山周辺に一定数あったことを窺わせる。

1 智度ならびに『義續』については、拙稿「智度とその著作『天台法華疏義續』について」を参照。

2 大久保良順「六祖門下の文句研究と円鏡について」、六四頁。

参考文献

松森秀幸「智度とその著作『天台法華疏義續』について」（『印度学仏教学研究』五八（二）、二〇一〇年三月）
大久保良順「六祖門下の文句研究と円鏡について」（『叡山学報』二四、一九六五年三月）

〈キーワード〉 湛然、智度、『法華文句記』、『天台法華疏義續』

（東洋哲学研究所研究員）